

銀魂～死神と呼ばれし
異常者～

白魔の巫女

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

第二次攘夷戦争の時異常者と呼ばれた侍は死神とも呼ばれ始めた。その侍は攘夷戦争が終わると姿を消した

目次

第一話時雨	1
第二話自己紹介	4
第三話姉と妹	8
第四話新八の姉お妙	11

第一話時雨

死神と呼ばれた一人の侍がいた。長い鎌と数本の刀を持った侍。鎌の色は白銀に輝いていた。宇宙から来た天人と戦い続けた侍だ。白夜叉とも並んで称されている。これを第二次攘夷戦争と呼ばれている。

水色の髪をした青年が町を歩いていて、瞳の色は赤と青のオツドアイ。彼の名前は時雨紅^{しぐれこう}。彼はまるで美を極めたように綺麗な美少年。彼の仕事は万事屋で基本的には料理を出すお店だ。名前は「時雨」。

「邪魔するぞ〜」

銀髪の天然パーマの青年がまだ開店前に入ってきた。彼は坂田銀時^{さかたぎんととき}。この飲食店の近くで万事屋をやっている。後ろから眼鏡をかけた少年とチャイナ服の少女が後ろからついてきた。

「良いんですか!? 銀さん!? 僕達お金無いですよ!」

眼鏡の少年が突っ込みを入れていた。彼は志村新八^{しむらしんぱち}。

「良いんだよ」

「本当にただで食べれるアルか？」

銀時が鼻をほじりながらそう言った。チャイナ服の少女が首をかしげながら聞いてきた。彼女は神楽^{かぐら}。夜兔族と言われる戦闘民族。

「言い分けねーだろ！アホが!？」

紅はそう言つて鎌で銀時の頭にさした。血が思い切り出た。紅は何事なく抜いた。

「え!?!何この人！いきなり銀さんの頭を鎌でブツ刺したんですけど!?!つて言うかどこから出したの!?!その鎌!？」

新八が突っ込みを入れた。紅は溜め息をついて反対方向に向きカウンター席に案内して座るのを見て言った。

「銀、コイツらはお前のところのバイトか？」

「まあそんな感じだ。お前の姉と妹はどうしたんだ？」

「聖姉と春の事か？今買い出しに行つてるよ」

この店はそもそも時雨^{しぐれ}聖と時雨^{しぐれ}春の二人で経営している。店の料理の大半のレシピは紅が考えた物だ。

「つてことはまだ開店前か？」

「ああ、開店するのは昼からだぞ！」

「忘れたのか？つていう目で見ていた。銀時は気にしていない。新八が代わりに頭を下げてきた。」

「あの、すみません！開店前に押し掛けてしまつて」

「別に気にすることではないよ。ただ、銀が来るのはお金がピンチなど気だけだがな」

「本当にすみません！」

「まあ良いんだけどね。自己紹介と食事どつちが先がいいかな？」

「食事！」

銀時と神楽が遠慮なく答えた。今作れるメニューを見せた。そこには色んな料理があった。

「何にする？」

「このビーフシユチューと牛丼アルね。ご飯は大盛り！」

「じゃあ俺はこのオムライスと牛丼」

「あんたらちよつとは遠慮しろ！せめて一つにしろ！」

第二話自己紹介

紅の料理を食べた銀時の反応は

「うめえ！相変わらずすげえうまいぞ！」

「う、うまい！滅茶苦茶美味しいですよこれ！」

「こんなに美味しい料理生まれて初めて食べたアル！」

三人とも涙を流しながらそう言ってきた。皆ガツガツ食べていた。紅はそれを満足そうに見ていた。

「さてと、自己紹介かな？俺の名前は時雨紅。銀の古い友人とも言えはいいかな？」

「私は神楽アル。万事屋の銀ちゃんで働いてるアル」

「あ、僕は「眼鏡アル」そう、眼鏡っておい！誰が眼鏡だ!?!」

神楽の言葉に突っ込みを入れた。あだ名が眼鏡らしい。

「成る程神楽ちゃんに眼鏡君か？」

「だから、違いますよ！僕は志村新八です。神楽ちゃんと同じように万事屋の銀ちゃん
で働かせてもらってます」

新八は今度はちゃんと自己紹介をした。それを聞くと紅は頷きながら言った。

「成る程ね。宜しくね神楽ちゃんに新八君」

「私は神楽でいいアル」

「僕もです。それにしても一人でやってるんですか？ここ」

新八は店を見渡して聞いてきた。飲食店でも結構大きい所だったからだ。

「いや、妹と姉の店なんだが俺がたまに手伝ってるのさ」

「妹さんとお姉さんがいるんですか？」

新八は紅に聞いた。すると苦笑しながら答えた。銀時は飯を食べていた。この件に関しては銀時も知っているからだ。

「まあ、義理だけどね」

「義理？..」

新八がそれを聞くと紅は懐かしむようにそして悲しむように答えた。

「昔付き合ってた女の姉妹達さ。わけあって俺の家族なったのさ」

「昔付き合ってたって今は付き合っていないアルか？振られたアルか？」

神楽が聞くと銀時が止めに入った。これは会って間もない神楽達が入っていいわけがないと思つたのもあるが、紅がこれで再び苦しむのを見たくないというのが一番だ。

「おい、お前らそこまでにしとけ。すまん紅。うちのやつらが」

「あはは、まあ、気になるよね？その話はまた今度話すよ」
苦笑いをして答えた。二人は深く追求しないことにした。

四人で話をしていると二人の女性が入ってきた。二人とも美人だった。二人とも金髪の美女。姉の名は時雨聖しぐれせい。妹の名は時雨春しぐれはる。姉聖の方はロングポニーテール、春はツイントールだった。

「あれ？銀さん来てたんですか？」

春が銀時に話しかけた。首をかしげっていた聞いた。隣の聖は紅を見てため息をつきながら言った。

「はあ、またですか？紅君」

「あはは、ごめん姉さん」

苦笑いしながら手を合わせて紅は謝った。銀時は密かに隠れようとしていると春が「ちよつと無視はひどいですよ！」

そういつてちよつと怒りながら言うのと銀時に聖は言った。

「銀さん、どこ行くんですか？」

「あ、ああ、えつとちよつとトイレに……」

「そうですか、トイレなら逆方向ですよ？」

そのあと銀時の悲鳴が響きわたった。

第三話姉と妹

銀時は机にふせつていた。神楽と新八は苦笑いをしていた。聖はため息をつきながら紅の入れた紅茶を飲んでいた。春は銀時の横に座っていた。紅は聖の隣にいた。

「全く銀さんは……」

「まあまあ落ち着いてお姉ちゃん」

「その辺のしてあげてお姉さん」

「二人がそういうなら仕方ないわね……紅君、あまり甘やかさないようにして」

聖は春と紅に押さええられたらそれ以上は言うのをやめようとあきらめた。紅に聖は注意をした。紅は頷きながら答えた。

「わかったよお姉さん」

「それで……この子達は誰？」

聖は新八と神楽を指して言った。春も頷いていた。銀時は未だに突っ伏しているの
で紅が答えた。

「この子達はどうかやら、万事屋銀ちゃんに働いている子達らしいですよ」

「へえ、万事屋で新しい子入ったんだ」

「ええ、驚きね」

紅が説明すると二人とも驚いていた。

2

新八と神楽の自己紹介が終わると聖と春のぼんになった。

「私は時雨春、お兄ちゃんの妹よ。よろしくね神楽ちゃんに眼鏡君」

「よろしくネ」

「眼鏡君って僕のことですか!?!眼鏡が本体じゃないからね!?!」

春は軽く自己紹介をして名前を呼ぶと神楽は頷き答えたが新八は突っ込んだ。

「私は紅と春の姉の時雨聖よ。よろしくね」

「よろしくネ」

「よろしくお願ひします」

「新p……じゃなくて眼鏡君」

「何で言い直した!?!なんにも間違えてないですから!?!眼鏡君が名前じゃないですから!?!」

僕の名前は志村新八ですよ!?!」

いい間違えて修正したかのような言い方に突っ込んだ。

「新八君はなんで銀さんのところで働いているのかしら?」

改めて質問をした。新八は苦笑いをしながら答えた。

「あはは、それは銀さんのところで侍道を学べると思つたからですよ」

「銀さんのところでね。まあ納得できるわね。神楽ちゃんは？」

「資金集めの為アル。でも私は資金がたまってはまだ帰りたくないアル。万事屋銀ちゃん三人いての万事屋ネ」

「成る程ね。すかれているわね銀さん」

微笑むように銀時のところを見た。銀時は突つ伏している状態のままだったが聖と春、紅にはわかつていた。照れ臭いからなのだろうと。

三人でしばらく心のなかで笑っていた。

そろそろ開店する時間になった。紅達は準備にとりかかった。銀時は依頼があるとこのことで帰っていった。開店してしばらくするとすぐに満席になった。この店は結構人気があるため並ぶ人がいるほどだ。三人協力してやっている。たまあに紅が他の仕事でいない時があるがそのときは二人が対応している。

第四話新八の姉お妙

紅は買い出しに出ていた。実は服のなかに鎌を収納してある。それは紅の愛用の鎌『百鬼夜行』。原理はめだかボックスの宗像形むなかたけいと同じ原理だ。常に持ち合わせている。

「あ、紅さんじゃないですか!」

野菜を見ていると後ろから聞きなれた声が聞こえた。その声の正体は眼鏡君こと志村新八だ。

「誰が眼鏡君だ!まるで眼鏡が本体みたいな言い方やめろ!」

その横には綺麗な女性がいた。紅はそれに気がつくとなんと新八に聞いた。

「隣にいる女性は誰だい?まさかさらつてきたのかい

?」

「んなわけあるか!?!あんたいつたい僕をなんだと思つてんだ!?!この人は僕の姉ですよ!」

疑うような目で見てきた紅に新八はツツコミをいれた。次は哀れむように見ていた。

「成る程、新……眼鏡君かわいそうに」

「何で言い直したー!? っっていうかかわいそうって何!?」

「いや、姉がこんなに綺麗なのに・・・ねえ、あ! もしかして君よう・・・」

いつてる途中ですかさず新八はツッコミをいれた。

「養子じゃねーよ!?! 確かに姉さんは美形で、僕は一般的だけど、義理の姉弟じゃねーから!?!」

「ボケるのもこの辺にして」

ふうと一息を吐いて言った紅に驚きツッコミをいれた。新八はぜえぜえと疲れた声をだしていた。

「自覚あったのかよ!?! わざとだったんですか!?!」

新八の姉志村妙しむらたえはクスクスとわらっていた。

「あらあら、新ちゃん。新しいお友達かしら?」

「この人は時雨紅さん。銀さんの昔からの友達で、この前知り合ったんですよ。紅さん、この人は僕の姉の志村妙です」

新八が二人をお互いに簡単に紹介した。紅が最初に自分の紹介をした。

「俺は時雨紅。歌舞伎町にある料理店で働いていたりするものだ。気軽に紅と呼んでくれ」

「私は志村妙です。紅さん私のことはお妙とでも呼んでください」

お互いに自己紹介が終わった。お妙が意外そうに言った。

「銀さんにこんなまともそうなお友達がいるなんて驚きね」

「別にまともって訳でもないけどね」

紅は肩をすくめるかのように言った。

三人は喫茶店に来ていた。紅は一度帰ってから戻ってきた。

「ご注文はなんでしょうか？」

「ブラックコーヒーを一つ、お妙さん達は？」

「私はお茶かしら」

「あ、僕も姉上と同じものでお願いします」

三人とも注文を終えて会話を再開させた。お妙が紅に聞いてきた。

「紅さんは銀さんといつから友達だったの？」

「小さい頃だったかな。俺も侍だからな。まあ俺の剣術は時雨流だけだな」

それを聞いて二人が驚いていた。新八は紅に聞いた。

「え？紅さんの家も道場だったんですか？」

「まあね。とはいっても昔の話だよ」

苦笑いしながら答えた。お妙は少し悩むようにしていた。そして思い出したかの

ように言った。

「時雨流つて言えば名門だった所じゃない！」

「よく知ってるね？道場の方をやる代わりに時雨家の本来の役目を与えるようにしたんだよ」

「あの、それって何ですか？」

新八が質問すると紅は首を振りながら答えた。

「君達にはまだ話せないよ。アレらはちよつと危険すぎるからな」

「アレ？」

新八がなにか言おうとしたらそこにウェイターがきてコーヒーとお茶を持ってきた。置いてから去っていった。

紅はそのコーヒーに懐から出した粉が入ってるなにかをとりだしかけていた。

「あのそれなんですか？」

「あ、これ？チョコだよ粉状のね」

「もしかして苦いの苦手だとか？」

「いや、その逆でこのチョコカカオ豆99%のチョコだから」

「はあ！紅さんまで変人だったのかー!?!」

新八の声が店じゅうに広がっていった。